

単純に、それは静雄の本音だった。彼の目は未だに諦めを含んでいない。それはそれで彼らしくも思え、愛おしくも思えるが、それでもできれば抵抗はして欲しくない。自分が焦れて、切れば帝人を怪我させてしまう。骨折くらいは簡単にしてしまうだろう。

ただ、自分は彼が欲しいだけだ。彼に怪我をさせたいわけではなかった。けれど、彼に怪我をさせたくないからこのまま思いとどまる、という選択肢は存在しない。欲しい、欲しいと貪欲に思いは募り、それははや暴走と言って良かった。止める術を自分は知らない。切れてしまったら、暴れるしかないとの同じだ。

「や、嫌です……っ、やめてください」

やめてください、と言いたいのだろう。理解はできたが、思いとどまる気持ちは欠片も沸き上がらない。すべてを聞く前にもう一度彼の唇を自分のそれで塞ぐ。再度、彼の舌を舐りつつ、静雄の両手は忙しなく彼の肌に触れていく。若い肌は男にしては柔らかいような気がする。なめらかで、滑らかで、手に吸い付くようだ。

「やあ、……んっ」

唇を離すと、そんな声音が響いた。それは甘く、悲鳴というよりも嬌声に聞こえた。いつもの彼とは少し違う、その声音。紡いだ帝人自身も驚いたのだろう。目を見開いている。元々大きな目が、ますます大きい。

(堪んねえな)

その表情、反応。すべてが静雄を煽る。

唇が乾き、無意識に舌でべろり、と濡らした。まるで舌なめずりする獣だと気づき、内心で笑いたくなる。浅ましいほど正直に、自分は彼を欲しがっている。笑うしかなかった。

「や……っ、そんなとこ、触らな、……っ」

胸元の粒を可愛がつてやれば、嫌だと首を左右に振る。女と同じように、ここが弱いらしいとその動作で知った。指で弄ったあとに、今度は舌で触れてみる。最初はそうでもなかったのに、触れているうちにそこは硬度を持つようになった。それが嬉しく、うれしい。

未だ剥いていないパンツ越しに彼の性器に触れてみると、こちらも形を成していることがわかった。

「……違っ、違うんです」

顔を羞恥で染め上げ、否定の言葉を紡ぐ。けれど、何が違うというのか。自分が彼の肌に、胸に触れ、帝人の性器は確かに欲情を示している。これは明らかな事実でしかないのに。

だから、静雄はやはり躊躇わない。先ほどと同じく、ボタンを外すことも早々諦め、力に任せた。ボタンがはじけ飛ぶ。そのあとは強引に下着ごと足から引き抜き、放った。途中で破れた音を聞いた気もするが、どうでも良い。

嫌です、とうわごとのように帝人は繰り返したが、聞く耳はもちろん持たなかった。

他人の、それも同性の性器をまじまじと見るの初めてだった。